

## 宗祇法師屋敷跡（下津野地区）

2021年は、郷土の偉人である宗祇が生誕して600年という節目の年です。宗祇（1421～1502）は、室町時代に活躍した連歌師で、和歌の西行や俳諧の松尾芭蕉とともに日本三代漂泊詩人として知られる人物です。

宗祇は幼くして仏門に入り、京都を拠点に30歳を過ぎた頃から連歌を志して宗祇に学びます。また和歌や古典、茶道や香道についても高い教養を持ち、將軍や朝廷に連歌の指導や古典の講義を行う中で、時の將軍足利義尚からは「連歌奉行」に任命されるなど、宗匠（連歌などの師匠）としての地位を確立していきました。

応仁の乱によって、大名が各地に割拠するようになると、諸大名の招きに応じて日本各地を旅し、連歌を地方に広めながら指導につとめ、連歌の最も盛んな時代を築きました。江戸時代になると連歌は廃れていきますが、俳諧にも大きな影響を与え、特に松尾芭蕉が最も尊敬していた詩人の一人でした。

宗祇の前半生については謎が多く、その出生地については諸説がありますが、その候補地の一つが有田川町下津野です。その伝承地が和歌山県指定史跡となっている宗祇法師屋敷跡です。屋敷地は平成14年（2002年）の宗祇法師没後500年祭を機に整備され、現在地元の一ツ松老人クラブの方々によって清掃活動が行われています。屋敷地には宗祇の産湯の井戸と伝えられる古井戸や歌碑、記念碑の他に室町時代の宝篋印塔があります。この宝篋印塔は、かつて屋敷跡の南側に存在したとされる勝福寺の境内にあったものを移したものと伝えられています。

【連歌とは】和歌から俳諧へ移る過渡期に生まれた文学で、上句（五・七・五）と下句（七・七）を交互に数人でよみ続ける。今日の俳句は連歌の発句が独立したもの。



宗祇法師屋敷跡